

匹見町埋蔵文化財調査報告書第33集

匹見町内遺跡詳細分布調査報告書 XIII

平成13年3月

島根県匹見町教育委員会

匹見町埋蔵文化財調査報告書第33集

匹見町内遺跡詳細分布調査報告書 XIII

平成13年3月

島根県匹見町教育委員会

序 文

本書は国庫補助事業として、平成12年度に実施した『匹見町内遺跡詳細分布調査報告』であります。本事業も今回で13ヵ年という歳を重ね、報告書もその冊数に至っているという状況であります。

この間、町内における歴史の古さが次から次へと塗り替えられてゆくとともに、たださかのぼってゆくばかりではなく、そこには多くの新事実の発見から、より肉づけされた幅のある歴史が明らかになりつつある、といつても過言ではありません。

こうした文化財といえるものは、ただ過去の遺産であるというものではなく、その英知を把握することによって、現在の我われの生活のあり方や、また未来を創造してくれる貴重な財産である、ということを認識する必要があるもとを考えます。今回も縄文時代などの新知な発見があったようですが、今後における開発に伴う事業において、教育委員会はそういった認識のもとに、積極的に関わり保存・保護に向かって努めてゆく所存であります。

最後になりましたが、発掘に携わっていただきました作業員の皆様方、また指導いただいた県担当職員、そして山口大学の中村友博教授、島根大学の山田康弘助教授・同汽水城研究センターの竹広文明助手らの諸先生に、厚くお礼を申し上げ、序文といいたしたいと存じます。

平成13年3月

匹見町教育委員会

教育長 松本 隆敏

例　　言

1. 本書は、平成12年度国庫補助事業として、匹見町教育委員会が行った町内遺跡詳細分布調査の報告書である。

2. 調査は、島根県文化財課の指導と協力を得て、次のような体制で実施した。

調査主体	匹見町教育委員会		
調査員	匹見町教育委員会文化財保護専門員	渡辺 友千代	
	匹見町教育委員会主事	山本 浩之	
調査補助員	匹見町埋蔵文化財調査室 （臨雇）		
	栗田 美文	大賀 幸恵	大谷 真乃
調査協力者		斎藤 美代子	渡辺 聰
調査指導	島根県教育委員会文化財課 山口大学人文学部教授		
	島根大学法文学部助教授	中村 友博	山田 康弘
	島根大学汽水域研究センター助手	竹広 文明	
事務局	匹見町教育委員会教育長	寺戸 等	（平成12年9月30日まで）
	（）	松本 隆敏	（平成12年10月3日から）
	匹見町教育委員会次長	大谷 良樹	
発掘作業員	栗川 修 栗田 勉 藤本 和正 村上 強 村上 稔		
	桐田 治雄 大谷ミツコ 大谷 幾子 益田 爰子		

3. 調査に際しては、土地所有者をはじめとして、地元の方々に終始多大なご協力をいただくとともに、また圃場整備事業担当者にもご協力いただいた。ここに感謝の意を表したい。

4. 本書に記載した配置図は縮尺1/1000のもので、匹見町土地改良区のご協力を得、また調査地点図は縮尺1/25000を使用したものである。

5. 今回の調査は、調査地点名は全て小字名をもって称することにし、また遺物・遺構の有無にかかわらず、「遺跡」という文語は用いずに、全て「地点」という文語を末尾に附して称することにした。

6. 資料作成等は、匹見町埋蔵文化財調査室の山本・栗田・大賀・大谷の協力を得て、執筆・編集は渡辺友千代が行った。

目 次

第1章 発掘調査に至る経緯と経過	(渡辺友千代)	1
第1節 発掘調査に至る経緯		1
第2節 発掘調査の経過		1
第2章 調査地域の地勢と歴史環境	(渡辺友千代)	2
第1節 一葛地区		2
1. 地区の地勢		2
2. 歴史環境		2
第2節 上井ノ原地区		4
1. 地区の地勢的立地		4
2. 歴史環境		4
第3章 各地点の調査概要	(渡辺友千代)	7
第1節 陣ヶ原地点		7
1. はじめに		7
(1) 調査の経緯		7
(2) 調査地点の位置と地形的立地		8
2. 調査の概要		8
(1) 調査区の選定と設定		8
(2) 層序と各調査区の状況		9
3. 出土遺物		10
(1) はじめに		10
(2) 実測遺物		10
第2節 アガリ・アガリノ原地点		11
1. はじめに		11
(1) 調査の経緯		11
(2) 調査地点の位置と地形的立地		13
2. 調査の概要		14
(1) 調査区の選定と設定		14
(2) 層序と各調査区の状況		14
3. 出土遺物		15
(1) はじめに		15
(2) 実測遺物		16

第3節 寺ノ前地点	16
1. 調査地点の位置と地形的立地	16
2. 調査の概要	16
(1) 調査区の選定と設定	16
(2) 層序と各調査区の状況	18
3. 出土遺物	19
(1) はじめに	19
(2) 実測遺物	19
第4節 前田地点	21
1. 調査地点の位置と地形的立地	21
2. 調査の概要	21
(1) 調査区の選定と設定	21
(2) 層序	21
3. 出土遺物	22
(1) はじめに	22
(2) 実測遺物	23
第5節 暖地点	23
1. 調査地点の位置と地形的立地	23
2. 調査の概要	23
(1) 調査区の選定と設定	23
(2) 層序と遺物包含層	23
3. 出土遺物	24
(1) はじめに	24
(2) 実測遺物	25
第6節 家ノ前地点	26
1. 調査地点の位置と地形的立地	27
2. 調査の概要	27
(1) 調査地点の選定と設定	27
(2) 層序と遺物包含層	27
3. 出土遺物	28
(1) はじめに	28
(2) 実測遺物	28
第7節 そのほかの調査地点	28
1. 骨川原地点	28
2. 家ノ上地点	29
3. 四石岩地点	29

挿図・図表目次

第1図 調査地点位置図	1
第2図 分布調査地点と周辺の遺跡（1）	3
第3図 分布調査地点と周辺の遺跡（2）	5
第4図 陣ヶ原地点配置図	7
第5図 陣ヶ原地点土層図	8
第6図 陣ヶ原地点出土遺物実測図	10
第7図 十井原地区分布調査位置図	11
第8図 アガリ・アガリノ原地点配置図	12
第9図 アガリ・アガリノ原地点土層図	13
第10図 アガリ・アガリノ原地点出土遺物実測図	15
第11図 寺ノ前地点配置図	17
第12図 寺ノ前地点上層図	18
第13図 寺ノ前地点出土遺物実測図	19
第14図 前田地点配置図	20
第15図 前田地点土層図	21
第16図 前田地点出土遺物実測図	22
第17図 瞳地点配置図	24
第18図 瞳地点上層図	25
第19図 瞳地点出土遺物実測図	25
第20図 家ノ前地点配置図	26
第21図 家ノ前地点土層図	27
第22図 家ノ前地点出土遺物実測図	28
第23図 骨川原地点出土遺物実測図	29
陣ヶ原地点遺物集計表	9
アガリ・アガリノ原地点遺物集計表	14
寺ノ前地点遺物集計表	18
前田地点遺物集計表	22
瞳地点遺物集計表	24
家ノ前地点遺物集計表	28

図版目次

図版1 陣ヶ原地点

1. 北西からみた調査地点
2. 南東からみた調査地点
3. B区の北西壁の状況
4. C区の北西壁の状況
5. B区の8層下位面に出土した炭化物
6. 実測遺物

図版2 アガリ・アガリノ原地点

1. 調査地点遠望（南から）
2. 調査地点近景（南から）
3. C区の北壁の状況（アガリ地点）
4. D区の北壁の状況（アガリ地点）
5. C区の北壁の状況（アガリノ原地点）
6. 実測遺物

図版3 寺ノ前地点

1. 南東からみた調査地点
2. A区の完掘状況（北から）
3. A区の南壁の状況
4. B区の完掘状況（南から）
5. B区の東壁の状況
6. 実測遺物

図版4 前田地点

1. 下流の対岸からみた土井原地図
2. 調査地点近景（東から）
3. 北壁の状況
4. 東壁の状況
5. 完掘状況（南から）
6. 実測遺物

図版5 磨地点

1. 調査地点遠望（南東から）
2. 調査地点近景（南東から）
3. 西壁の状況
4. 北壁の状況
5. 完掘状況（南から）
6. 実測遺物

図版6 家ノ前地点

1. 南からみた調査地点
2. A区の南壁の状況
3. A区の完掘状況（南から）
4. B区の東壁の状況
5. B区の東壁の状況
6. 実測遺物

図版7 その他の調査地点

1. 南からみた骨川原地点
2. 北壁の状況（骨川原地点）
3. 実測遺物（骨川原地点）
4. 南東からみた家ノ上地点
5. 南西からみた四石岩地点
6. 南からみたB区の完掘状況（四石岩地点）

第1章 発掘調査に至る経緯と経過

第1節 発掘調査に至る経緯

本詳細分布調査は2つの開発事業、つまり「(主)六日市四見線三葛II区交A(改良)工事」、そして「益美地区岩崎中山間地域総合整備事業(澄川工区)」に伴い、それに先立ち実施した分布(試掘)調査である。

このうち前者に関わる事業は、島根県益田七木建築事務所から提出された工事計画書に伴い、事前に実施したもので、また後者は、益田農林振興センターによる該当地域における圃場整備事業が計画されているためのものであった。

第2節 発掘調査の経過

調査は平成13年度において、「(主)六日市四見線三葛II区交A(改良)工事」が計画されている三葛地区の、周知の遺跡として認定されている「陣ヶ原」から実施することにした。

該当地は、古戦場であったという資料(古賀記)などから周知の遺跡として認定された地点であって、今まで現地調査は行われてはいないため、したがって具体的な出土物などは皆無であった。

本分布調査は、平成12年4月20日から同年5月18日にかけて実施し、報告しているとおり、8層の黄灰色砂礫層の上位部から縄文土器数点、炭化物が検出され、縄文遺跡であることが判明したのである。

また、上井原地区における圃場整備事業にかかる分布調査は、平成12年11月6日から同年12月22日にかけて実施した。同地区での周知の遺跡は中世期の叶松城跡のみで、原始・古代のものは明らかでなかったが、今回の8地点を選定して調査した結果、3地点で該当期の遺跡が確認されたのである。

これらの分布調査の結果をふまえ、今後、文化財の保存・保護にどのように対応していくかを事業者側と協議していく必要があろう。いずれにしても、次年度に向かって前向きな対応が迫られていることは確かである。



第1図 調査地点位置図

(渡辺友千代)

第2章 調査地域の地勢と歴史環境

第1節 三葛地区

1. 地区の地勢

本地区は、町域の南東側という僻地に位置（第1図）し、さらに該地の南東側には1000m内外の中因脊梁山地が北東—南西方向に走って境山をなし、そこは広島・山口の2県に接しているという山間地にある。また地区を貫流する紙祖川の源流は、その2県とに接した後冠山（1300m）にあって東流し、狹小な谷平地を形成した集落地で積木川・三葛川などを集めて北流するといった立地にある（第2図）。

こうした紙祖川に沿って形成された狹小な谷平地は、堅田・笹山・三葛という集落地にみられ、このうち上流側の三葛が比較的拓けていて、それらの標高は約450~550mを測る。また下流する紙祖川をU字状に取り囲む山地は、南東の高山で1279mの額々山、赤谷山（1181m）、安蔵寺山（1263m）などが重なり、また下流の北西でも700~900m台の山地が聳立している。

2. 歴史環境

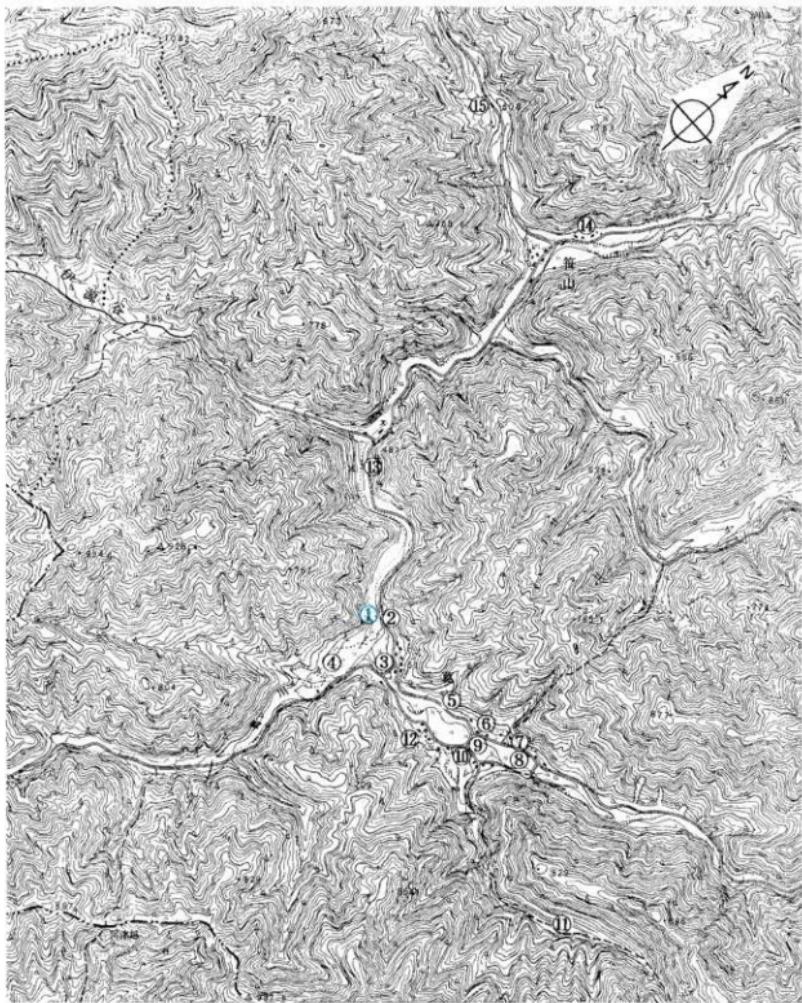
山間地である本地区は、古くから農林業を中心とした生業によって支えられてきた。殊に製炭業は昭和中ごろまでは盛んに行われ、現在では山葵（わさび）・椎茸栽培などの1次産業を中心である。

近世の藩制時代には四見組の16ヶ村中の「三葛村」として成立し、その生高は凡そ140石~150石余りであり、戸数は30~35であった（後期）。そして山裾では焼畑とともに三稜・格が栽培されて石見半紙も盛んに行われたのであった。また一方、山地には「木地師」と言われる漂泊の民が良材を求めて逗留した地区としても顯著（第2図）で、その痕跡は今でも多くの墓石、あるいは「本地原」といった地名などにみることができる。

本地区における中世の様相は明らかではないが、新井屋廬では初期に位置づけられる須恵器が採集されており、また杜ノ谷では13世紀のものと考えられる「蓬莱山文鏡」の和鏡が発見されているなど、その痕跡がないでもない（第2図）。一方、15~16世紀において、地区の支配階級だったと考えられる大谷氏が住居したという「殿屋敷遺跡」では、該当期における支配者がどのような生活振りをしていたかなど、出土した遺物・遺構がそのことを如実に語っており、貴重な遺跡も存在しているのである（註1）。

そのほか原始・古代では、その殿屋敷遺跡の下層から縄文時代晩期のものが、そして門田遺跡からは数点ではあるが、縄文時代中期のものが発見され、また五百石では縄文時代後期のものが出土しているなど、該当期における遺跡はけして貧弱ではないのである。また中ノ坪遺跡（註2）では竪穴住居、数10基の集石などの遺構をはじめとして、多量な縄文時代前期の遺物が発見されており、特に注意されているのである。

このように山間の狭地とはいえ、比較的縄文時代が分布しているという現象には該当地が狩獵採集



凡例

- | | | | |
|-----------|---------|------------|----------|
| ① 陣ヶ原地点 | ② 杜ノ谷遺跡 | ③ 中ノ坪遺跡 | ④ 五百田遺跡 |
| ⑤ 橋ヶ谷の宝塔 | ⑥ 土井跡 | ⑦ 妙玄寺跡 | ⑧ 門田遺跡 |
| ⑨ 清左衛門田遺跡 | ⑩ 殿屋敷遺跡 | ⑪ 積木谷の木地屋墓 | ⑫ 新井屋畠遺跡 |
| ⑬ 中ノ原遺跡 | ⑭ 寺屋敷跡 | ⑮ 加冷谷木地屋墓 | |

第2図 分布調査地点と周辺の遺跡（1）

時代において、落葉広葉樹林地帯という最適地であったこと、また石材の供給地であった冠山に近接していたということによるものと考えられる。

第2節 土井ノ原地区

1. 地区の地勢的立地

本地区は、匹見町大字澄川のうちの1つの字をいい、そこは町域の北西にあたる（第1図）。現在戸数は31で、主に農林業を中心としているが、若・中年層は土木作業員などに従事し活計する。集落の北西側には南北流する匹見川が流下し、北東の対岸には、比高差約7mを測った狭地な水田とする河岸段丘がみられる。その集落をなす左岸側は、標高145～200mを測った約55mの比高差をもつ傾斜地に立地し、匹見川に沿って約1キロ、山側に向かって約500m範囲に形成されている（第3図・第7図）。

周辺にひかる山地は、約724mを測る野間山を最高とし、そのほとんどは500m前後のもので占められ、低地にはカシ・ツバキ類などの照葉樹林、高地にはコナラ・ミズナラなどの落葉広葉が繁茂している。そして、そこにはウサギ・タヌキ・キツネなどがみられ、中動物ではサル・イノシシ、そして時にはツキノワグマもみられるといった生息環境下にある。

2. 歴史環境

「上井原」と呼称されているように、該地は地名などから中世の村落形態を窺い知ることのできる地区である。

例えば、北東一南西方向に流下する匹見川に沿う狭地な場所とはいえ、下流側の山地から派生して突出する尾根筋には叶松（かのうまつ）という山城が存在し、その北側山裾には13筆におよぶ「土井」という地名がみられ、河寄りに向かって數筆の「上井ノ沖」という地名も存在しているのである。

16世紀後半、寺戸氏が割拠したという史実から、そこは居館が設けられていた場所だったと想像される。そして隣接には「倉ノ段」とか「江ノ段」、また「中邸」「上邸」という居館に係わる地割地名もみられるのである。そのほか、地内には「紺屋敷」あるいは「銀治屋敷」「代官屋」などの地名もみられ、それらは技能的職業者の住居地だったのではないかと思われるものもあり、また武士が弓の訓練に励んだものか。あるいは祭祀に関わったものは判然としないが「的場」、そして「サンジメ」などの注意される地名もみられるのである。

なお該地には、その寺戸氏の創建といわれる澄川八幡宮（寺戸資能による）、また曹洞宗の白徳庵（寺戸和泉守資清の創建という）が現存し、一方「上井ノ沖」の川畔には「舟場」という地名もみられることから、交通の手段方法など、そこには該当期における村落形態の一面を垣間みることができるのである。

さて、ここで指揮範囲の周知遺跡をみると、下流の谷口地区には澄川氏が拠城したという金山城跡、1キロ上流側には叶松城の支城であったと想定される中世の山城の城跡（註3）が長尾原地区に分布している（第3図）。また持三郎地区には13世紀前半の山根ノ下遺跡があり、そこでは土師器類を中心とするが、他に青磁・白磁などの輸入陶磁類などが出上し、中でも鉄刀や和鏡の検出は、遺跡の性格を知る上からも貴重なものである。



凡　例

- | | | | |
|-----------|---------|---------|-----------|
| ① 分布調査地点域 | ② 叶松城跡 | ③ 金山城跡 | ④ 嵩城跡 |
| ⑤ 田屋ノ原遺跡 | ⑥ 丸測鉾跡 | ⑦ 小田原遺跡 | ⑧ 長連寺跡 |
| ⑨ 山根ノ下遺跡 | ⑩ 松ヶ谷鉾跡 | ⑪ 広瀬城跡 | ⑫ 広瀬沖ノ田遺跡 |
| ⑬ 和又古墳 | ⑭ 荘盤城跡 | ⑮ 芝地点 | ⑯ 小泓地點 |

第3図 分布調査地点と周辺の遺跡（2）

原始・古代遺跡においては、持三郎地¹に縄文時代後期の鐘崎式が多量に採集された芝遺跡、三山原地区には縄文時代中期から弥生時代後期にかけての田屋ノ原遺跡などが口をひく（第3図）。ただし該地では原始・古代遺跡は皆無であったが、本報告するように、アガリ・寺ノ前・畠の3地点では該当期のものが出土しており、けしてそうでは無かったことを証明しているのである。

（渡辺友千代）

[註1] 匹見町教育委員会『三島地区墓盤整備促進事業に伴う発掘調査報告書戰国時代の鍬尻敷遺跡』1999年3月発行

[註2] 匹見町教育委員会『三島地区墓盤整備促進事業に伴う発掘調査報告概報中ノ坪遺跡』1999年3月発行

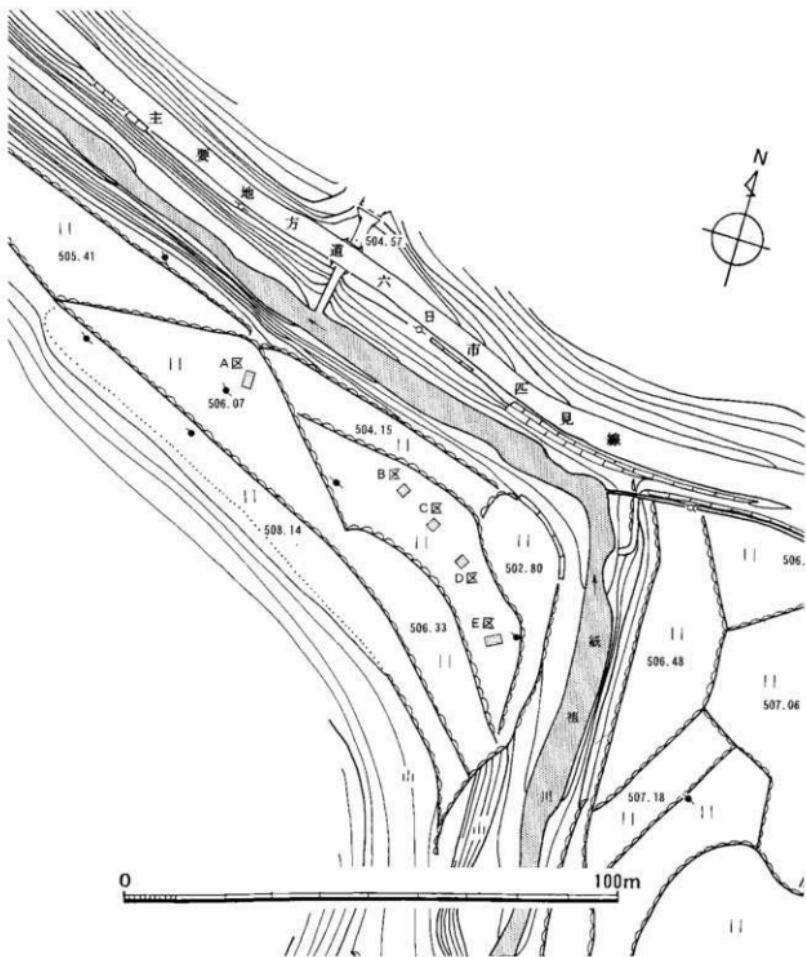
[註3] 匹見町教育委員会『一国道488号灌川バイパス工事に伴う 畠城跡発掘調査報告書』2000年3月発行

第3章 各地点の調査概要

第1節 陣ヶ原地点

1. はじめに

(1) 調査の経緯



第4図 陣ヶ原地点配置図

本地点は、前年度における島根県益田土木建築事務所からの「(主)六日市匹見線三葛Ⅱ工区(A改良)工事」計画の提出に伴い、それに先立ち実施された分布調査で、平成12年4月20日から同年5月18日にかけて現地調査を実施したものであった。

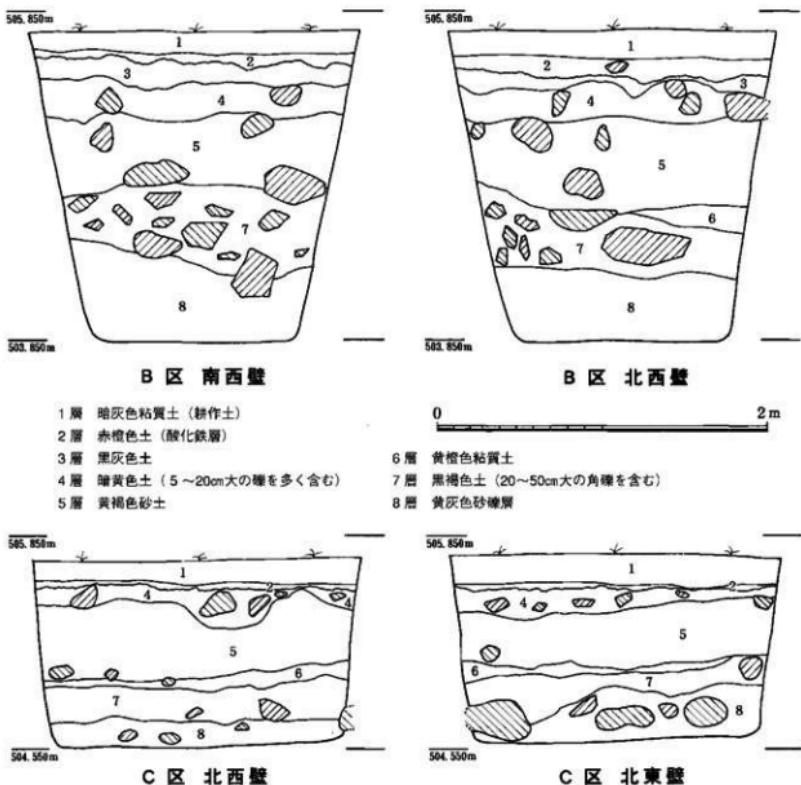
(2) 調査地点の位置と地形的立地

本地点は、島根県美濃郡四見町大字紙祖463番地に所在し、そこは小字名でいう「三葛」(みかずら)地区の陣ヶ原といわれる場所である(第2図)。

該地は、谷平地を形成する集落の最下流地にあたっているものの、そこはなんだような狭窄な地形を呈し、流下する紙祖川と山地との比高差も大きい。その斜地に形成された水川は3段から成り、最幅部で約500m、長さ約1000mを測る三角形を呈した場所である(第4図・図版1-1・1-2)。

2. 調査の概要

(1) 調査区の選定と設定



第5図 陣ヶ原地点土層図

8層は黄灰色砂礫層で、実質的には河床疊と思われるもの。ただしB区では、分層はしていないが、上位部に赤味滞びた粘性の砂質土が若干みられ、その層位から多量の炭化物（図版1-5）・そして縄文土器3点が出土した（図版1-6）。方形2mという狭さから、それらが遺構部分から出土したものかは明確にできなかったのである。

他の調査区の状況 下流側に設定したA区は、1～3層までは基本的層序と同様であったが、その下位層に至っては、1m余り掘削したにもかかわらず、円疊が充填していてその可能性が薄いと判断して止めた。本調査区からは1～2層で1点ずつの石器剥片、陶磁器が採集され、3層からは2点の石器剥片が出土した（第6図・図版1-6・遺物集計表）。

E区は、基本的層序として捉えたものと類似したが、その層位は総体的に薄層で、1～8層までの掘削高は1.4m余りであった。本調査区からは、1～2層から採集された附磁器2点のみであった（遺物集計表）。

D区は、上流側に設けた2m×3mの調査区。6層まで掘削したが、3層以下は砂礫が充填し、文化層と認められる層序は確認できなかったのである。

3. 出土遺物

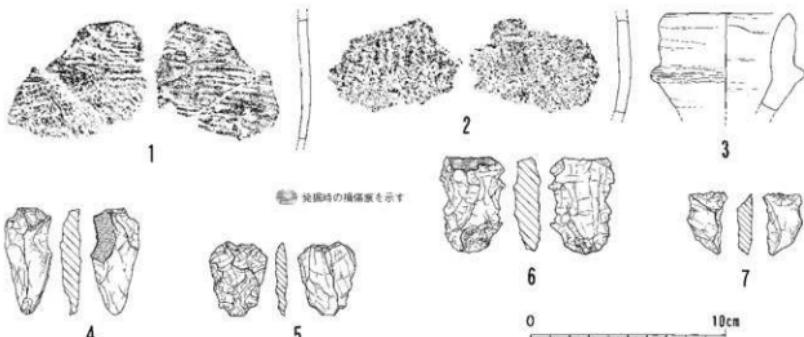
(1) はじめに

本地点からは、1～2層を中心に5点の陶磁器類、搬入したものと思われる3点の石器剥片、そして縄文土器1点が採集されている。3層からは、2点の石器剥片、そして1点の石英の剥片が出しし、とくに層位的にも8層上位から出土した4点の縄文土器は注意されよう。しかも多量の炭化物との共伴（図版1-5）は、その分析を行うことによって、時期の設定が可能になると想定されるからである。

なお、これらのほか1点の須恵質片が採集されており、採集・実測を含め、本地点から炭化物とともに計18点の遺物が確認された（遺物集計表）。これらのうち、特徴的な遺物を探り上げ、以下若干の説明をしておくことにする。

(2) 実測遺物（第6図・図版1-6）

縄文土器 1は、B区の8層から出土した縄文土器で、胴部片と思われるもの（3片を接着したも



第6図 陣ヶ原地点出土遺物実測図

の）。内外面ともに条痕を施すが、うち内面は比較的顯著。器壁は3~4mmで、薄手。胎土は緻密で、焼成は極めて堅緻。色調は暗褐色を呈し、外面には煤が付着する。条痕幅が比較的密で、薄手という精緻なつくりからみて、おそらく早期末、あるいは前期初めのものと考えられる。

2は、C区の2層に出上した縄文土器で、胴部片と思われるもの。外面に粗い縄文、内面には条痕文を施し、5~6mmを測ってやや厚手である。胎土には砂粒を含んでいて、明らかに前者とは異なる。2層に出上したためか、酸化鉄が付着して部分的に茶褐色を呈すが、胎土の色調は灰褐色である。調整や文様形態からみて、おそらく中期に位置付けられるものであろう。

須恵質土器 3は、D区の隣辺で表面採集された、須恵質の口縁部。器壁はぶ厚く、口縁径約7cmを測って壺状を呈し、口縁部外面に凹み滯びた凸筋状のものがみられる。器形的にも、その用途は判然としないが、堆積であったものかも知れない。おそらく器質からみて、中世期のものであろう。

石 器 4は、安山岩質のもので、A区の3層から出上した尖頭状の石器剥片。背面には2面からなる打裂がみられるが、その1面は横方向から。また腹面には1方向からの單裂のみで、細部調整などの2次加工はみられない。ただし腹面の基部には、有茎であった可能性もある細部加工がみられる。5は、C区の8層から出上した安山岩質の石器剥片。器長3.8cm、最大器幅約3cm、最大厚3mmを測って石鎌形を成す。背面には単刃の剥離面と思われる加工がみられるが、腹面にはその意図はみられず、また周縁部にも細部調整はみられない。

6は、A区3層に出上した安山岩質の石器剥片。背面には部分的に自然面のこる一方、周縁部を中心部に向かって、数打の加撃による剥離面がみられる。また腹面もそうであるが、母岩からの1次的に剥離した楔形石器であろう。

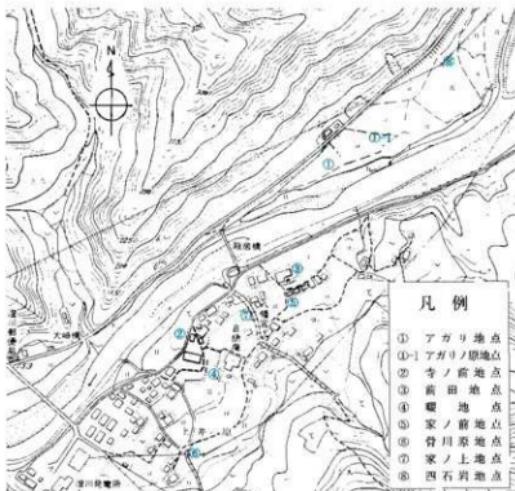
7は、B区の1・2層から採集した安山岩質の石器剥片で、意図的な2次加工などは認められない。

第2節 アガリ・アガリノ原地点

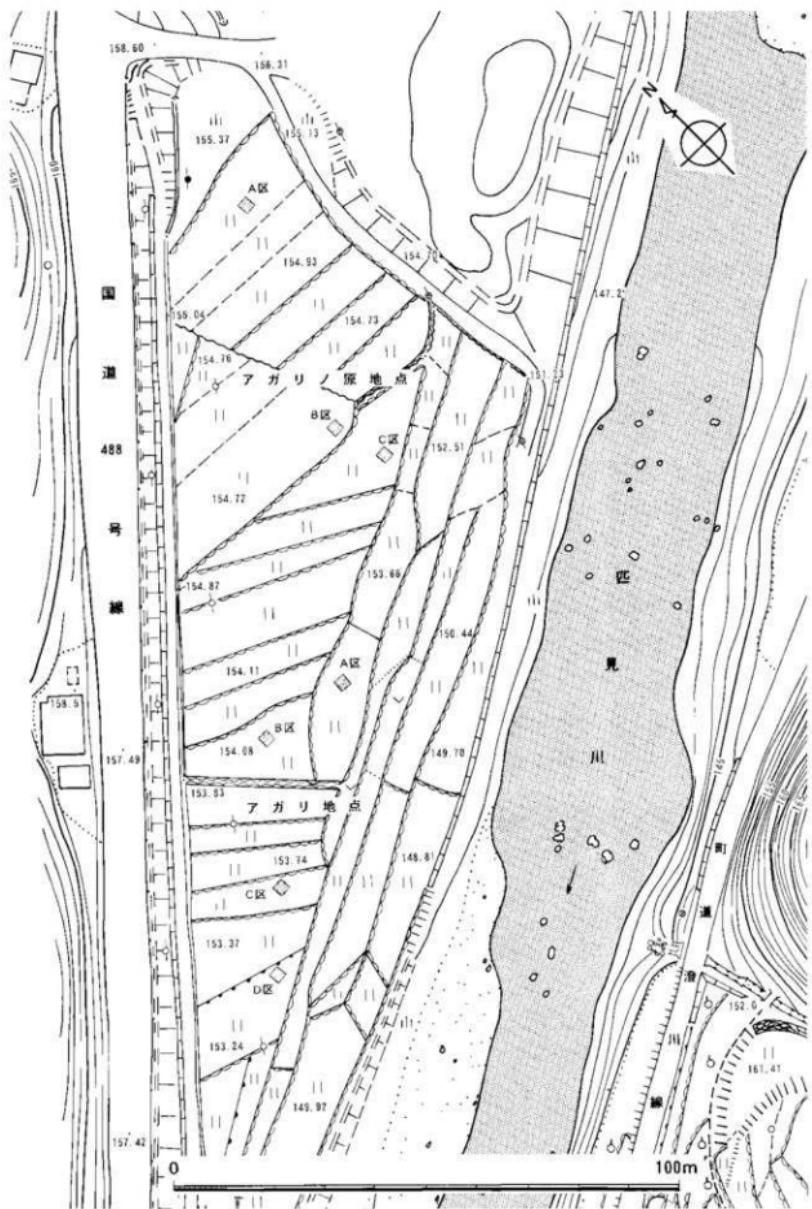
1. はじめに

(1) 調査の経緯

本地点は、平成11年度から行われている「益美地区県営中山間地域総合整備事業（澄川工区）」に



第7図 土井原地区分布調査位置図

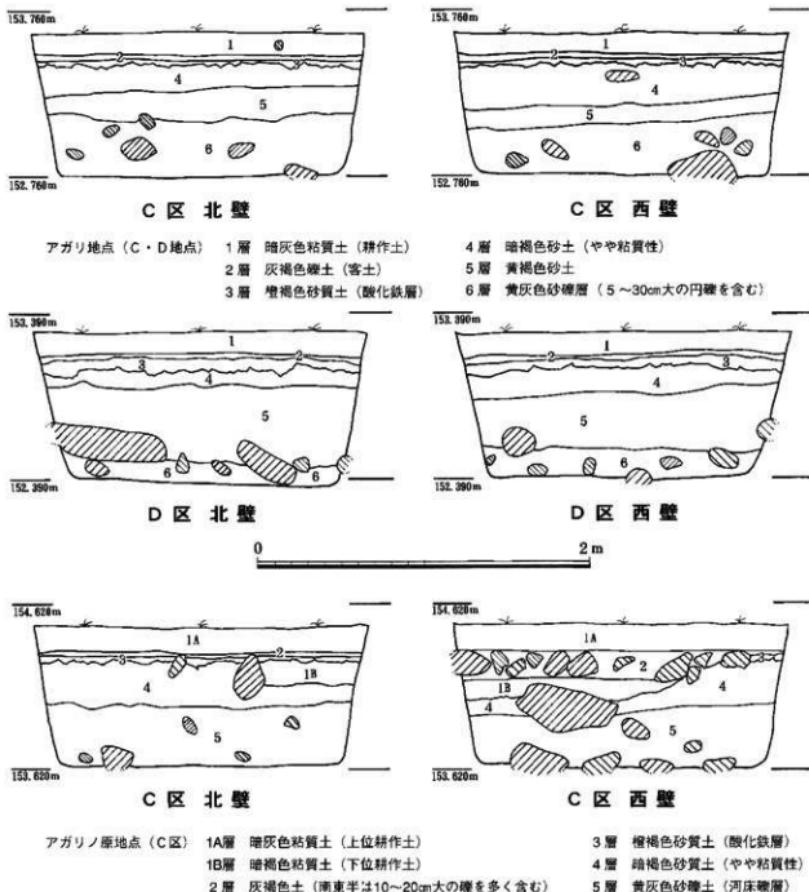


第8図 アガリ・アガリノ原地点配置図

併し、それに先立ち実施した土井原（どいのはら）地区における、その1地点の調査にあたるものである。該当地区における開発事業は、同13年度の予定であるため、したがって本分布調査は同12年度に実施したのである。なお、本節以下の各節は總て、上述の事業に先立ち実施したものである。

(2) 調査地点の位置と地形的立地

本地点は、島根県美濃郡匹見町大字澄川イ866番地（アガリ）、同イ867番地（アガリノ原）に所在する。



第9図 アガリ・アガリノ原地点土層図

基盤層と思われるので、以下の掘削調査は止めたのであった。

アガリノ原 その層序は、1層の耕作土（水田）、2層の灰褐色土、3層の橙褐色砂質土（酸化鉄の含浸による）、4層の暗褐色砂質土、5層の黄灰色砂礫層の順で堆積し、基本的には下流側のアガリ地点と同類であった。ただし、調査区での堆積状況をみる限り、マチダオシ（水田の再整備）の痕跡、あるいは全般的に各層序とも、河石を中心とした礫が多かったという傾向がみられたのである（第9図・図版2-5）。

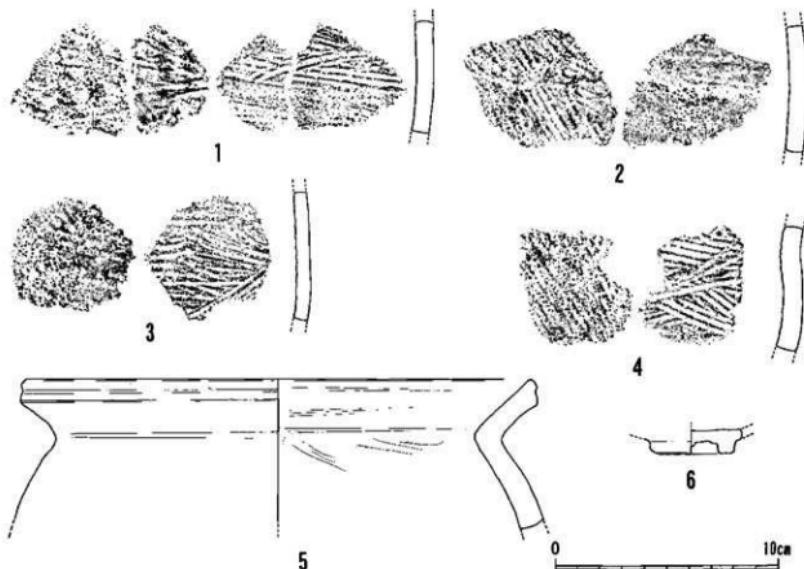
本地点での出土物は、B・C区の1～2層で陶磁器3点、C区の4層上位を中心に、2点の弥生土器片が確認された（図版2-6）。

3. 出土遺物

(1) はじめに

アガリ・アガリノ原から出土した遺物を1括してみると、1～2層から採集したものは陶磁器類の5点、そして4層の上位に弥生土器2点、同下位に縄文土器39点であった（遺物集計表）。このうち39点の縄文土器は、調整や色調からみて、ほとんどは同個体分のものであり、他に2・3点のみ以外のものと思われるものがみられた。また陶磁器の5点のうち、2点のみは中世のものと思われる磁器であった。

ただし、これらの出土遺物のほとんどが2～3cmと小・細片であったので、このうちから大片であった数点のみを取り上げ、紹介しておくことにする。



第10図 アガリ・アガリノ原地点出土遺物実測図

(2) 実測遺物 (第10図・図版2-6)

縄文土器 1～4は、すべてD区の4層下位に出土した粗製のもの。このうち1は、2片を接合したもので、内外面とも条痕調整した胴部片。外面には指押圧によると思われる成形痕がみられ、凹凸する。器壁は8～10mmを測って厚く、胎土には多量の砂粒を含む。色調は黄灰色を呈し、焼成は良いとはいえない。2も胴部片と思われるもので、2片を接合したもの。内外面とも条痕調整とするが、内面はそれほど顯著ではない。器壁は7～9mmを測って、胎土には多くの砂粒を含んでいる。色調は黄灰色を呈し、内面には多少の煤が付着する。

3は、内外面とも条痕調整とするが、外面は腐朽のためか、その調整は顯著ではない。器壁は5～7mmを測り、胎土には砂粒を多く含む。色調は灰～黄灰色を呈し、焼成は他に比べれば良い。4は、2片を接合したもので、内外面とも条痕調整。器壁は7～9mmを測り、厚手。色調は黄灰色で、胎土には他のものと同様、砂粒がみられ、焼成も堅緻といえるものではない。

弥生土器 5は、アガリノ原地点のC区4層に出土した弥生上器。菱形の口縁部で口縁部は「く」の字状を呈し、その口端部外面には1条の直線文を施す。外面はヨコナデとし、内面の頸部下はケズリ調整、その部上から口縁部はヨコナデとする。内外面の色調は赤褐色で、胎土は石粒を含んでいる。器形・調整などからみて、おそらく後期中ごろの所産のものであろうと思われる。

陶磁器 6は、アガリ地点のA区1～2層で採集された白磁の高台部。高台のみであるため、形態はわからない。内面には薄い釉が施されているが、外面にはない。置付は凹み滯び、高台内の中志部には凸状の突起がみられる。胎土は総体的に白っぽいが、まばらに斑点あるいは筋状の灰色の上質が嵌入している。造形・施釉方法などからみて、15世紀ごろの中国製のものであろう。

第3節 寺ノ前地点

1. 調査地点の位置と地形的立地

本地点は、島根県美濃郡匹見町大字澄川1998番地ほかに所在する。そこは北東側約40mのところを比高約7mを測って匹見川が南西流し、その対岸の南東側は緩傾斜となり、民家や田畠が点在した可耕地であるという景観である（第7・11図・図版3-1）。

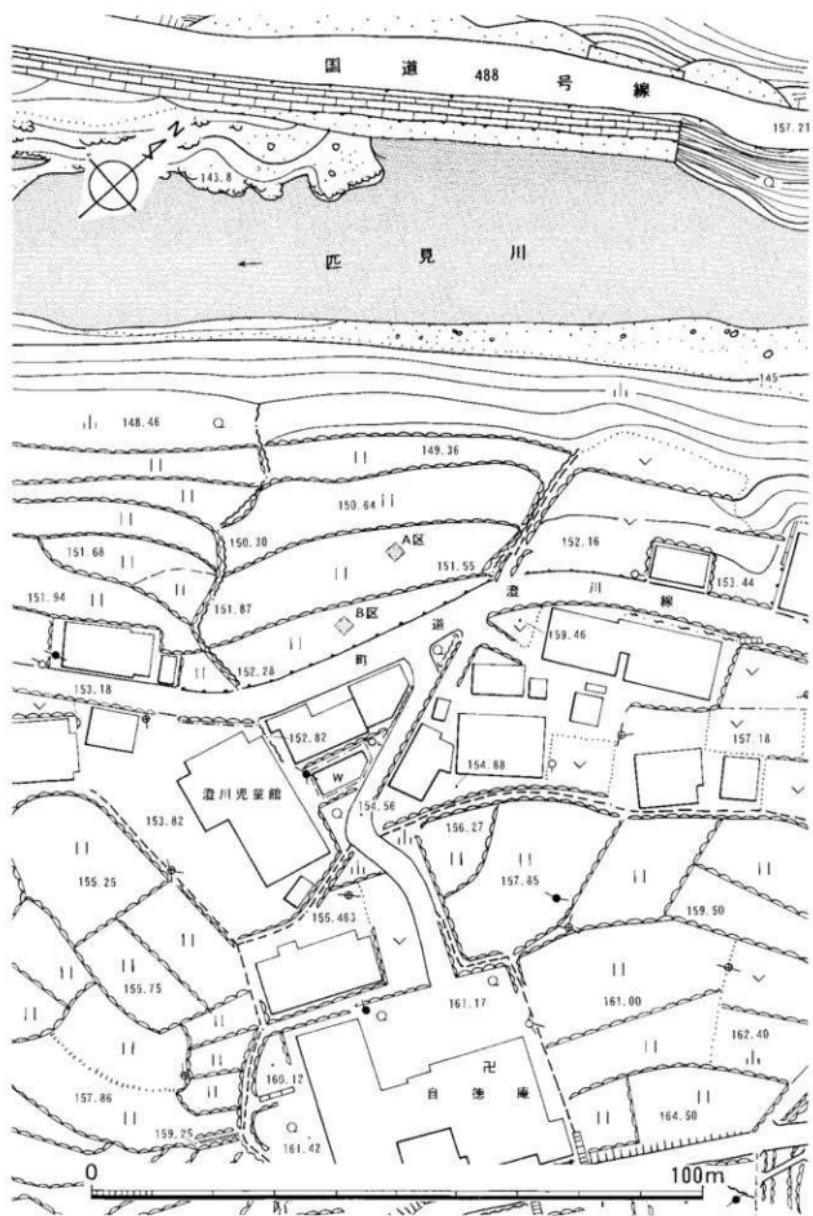
現地の標高は約152mを測る水田で、その水田は石垣築地の2段からなり、その高低差は約40cmであった。地点名は小字名を引用したものであるが、50m南東側の山裾には白徳庵（曹洞宗）という寺院があることから、それに因んで呼称されたものであろう。

なお、該地区には南西側400mに中世の山城跡である叶松城跡、そして上流には城跡などの周知の遺跡が分布している（第3・7図）。

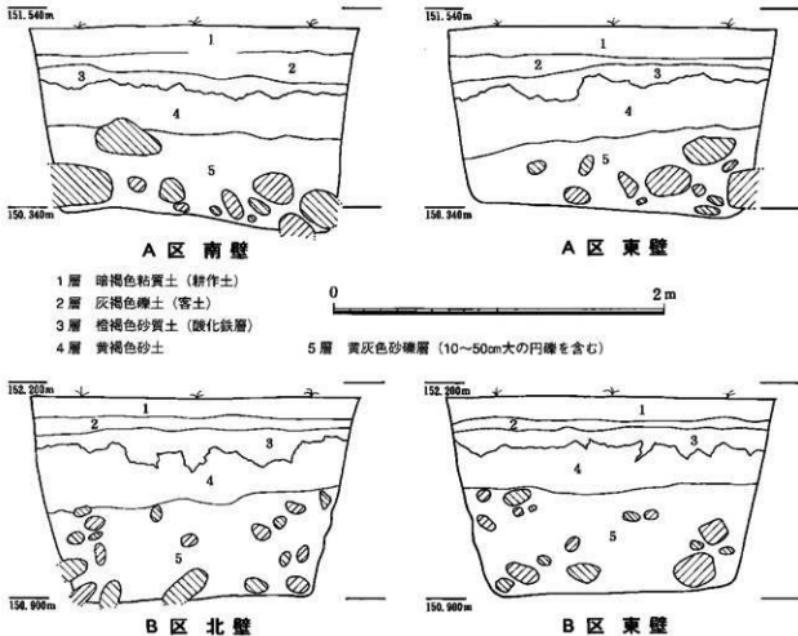
2. 調査の概要

(1) 調査区の選定と設定

北東～南西方向に細長い2つの水田に、調査区を上段の水田にはそのほぼ中央に、そして下段には上流の北東側に任意に設定することにした。その調査区は、2m方形のものを南北方向に1区ずつとし、下段の水田のものをA区、上段のものをB区と名称することにしたのである（第11図）。



第11図 寺ノ前地点配置図



第12図 寺ノ前地点土層図

(2) 層序と各調査区の状況

本地点の基本的層序は、水田耕作土の1層、客土としての灰褐色疊土上、酸化鉄が含浸した橙褐色砂質土の3層、黄褐色砂土の4層、円礫を含んだ砂疊層の5層の順で堆積する（第12図・図版3-2-5）。

このうち1層は、16~19cmを測ってほぼ水平に堆積するが、それ以下の層序は河（低位）一山地（高位）方向に対して傾斜していた。おそらく原地形を呈しているものと思われ、それは2m間で約20cmの傾きであった。そして2層の層厚は5~10cmを測り、河寄りのA区の層厚差が著しかった。なお、1~2層からは搬入したものと想定される縄文土器と、中世・近世期の陶磁器類や、そのほか瓦質・須恵質土器など数点が採集された。

3層は酸化鉄が含浸した層で、その層厚5~30cmを測って厚薄差のはげしい層位であった。土壤の色調から分層しているものの、層序からは4層と同一のものと考えられる。その4層は、砂性的黄褐色土で、層厚20~35cmであった。本層からは

縄文土器が出土したが、このうち河寄りのA区の方が12点と多かった（遺物集計表）。なお、石器類や遺構は検出されていない。つぎの5層は、10~50cm大の円礫を多量に含んだ

寺ノ前地点遺物集計表

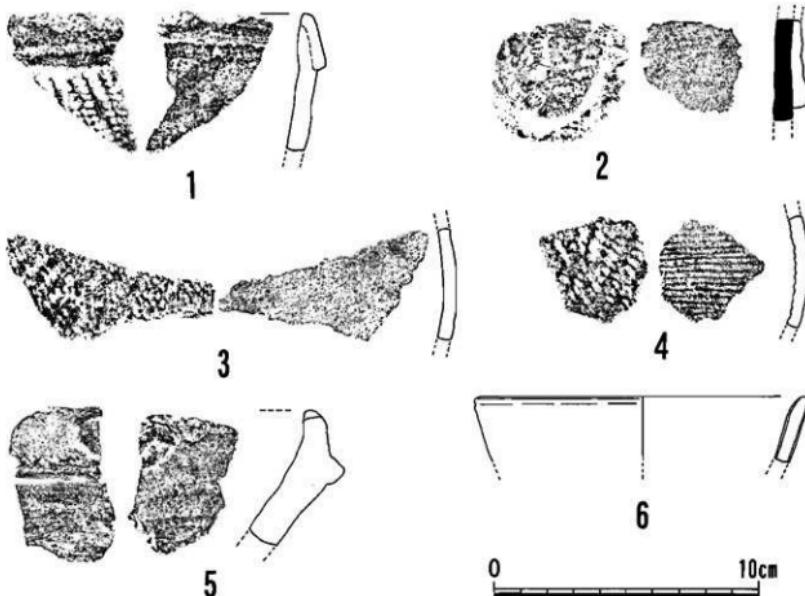
区名	層名	縄文土器	御殿土器	瓦質土器	陶磁器	鉄	漆	計
A区	1~2層		1	3	2	1		7
	4層	12						12
B区	1~2層	2		—			2	
	4層	4		—				4
計		18	1	3	2	1		25

砂礫層で、河沿いということから基盤の河床といえるものであろう。本層では遺物・遺構とも検出されていない。

3. 出土遺物

(1) はじめに

本地点では、18点の縄文土器、1点の須恵質、3点の瓦器質、2点の陶磁器、1点の鉄滓が出土した（遺物集計表）。これらの出土した遺物は、4層からの出土したものは実測採り上げをしているが、それ以外の1・2層のものは採集のみとし、実測したものではない。



第13図 寺ノ前地点出土遺物実測図

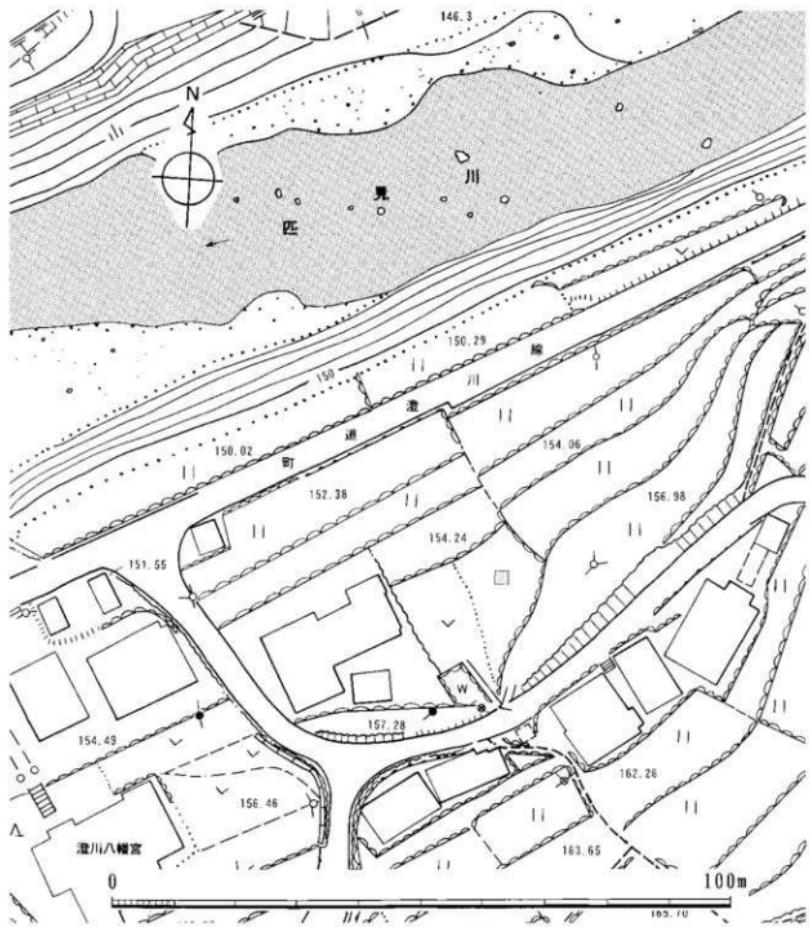
(2) 実測遺物（第13図・図版3-6）

縄文土器 1は、A区4層から出土した口縁部。外面にはR.Lの縄文を施し、内面はナデ。外面口端部には帯状の貼付けをめぐらし、その部位はナデ。器壁は6mmで、比較的胎土に砂粒を含む。色調は黄褐色を呈し、焼成は良い。形態からみて、中期に位置づけられている波子式系のものであろう。2は、B区の1～2層で採集したもの。外面にはR.Lの縄文を施し、その器面にくねった貼付帶がつけられたもの。その貼付けられたものは幅1.5～1.8cmで、高さ2～6mmを測り、その部面上には粗い縄文を施している。内面は精緻なナデ、器壁は約5mmで薄手。胎土は砂粒がみられ、色調は茶褐色を呈し、焼成は堅緻である。

3は、B区4層から出土した胴部。外面にはR.Lの縄文が施され、内面は精緻なナデ。器壁は約

4 mmを割り、薄い。4は、A区4層に出土したもの。外面には粗いR Lの縄文を施し、内面には規則正しい平行の条痕を施す。器壁は3 mm前後と極めて薄手である。外面には僅かの煤が付着するが、胎土は黄褐色を呈している。施文や器壁が薄いということからみて、磯ノ森式などに併行するものかもしれない。

陶磁器 5はB区の1～2層で採集された擂鉢の口縁部。口縁の形態からみて、15世紀のものと思われ、備前焼であろう。6も、B区の1～2層で採集されたもので、青磁である。細片で器形は明確ではないが、楕形の口縁部であろう。釉層は比較的厚く、冰裂文がみられる。色調は灰緑色を呈し、胎土は白灰色である。おそらく15世紀の中国製の所産のものであろう。



第14図 前田地点配置図

第4節 前田地点

1. 調査地点の位置と地形的立地

本地点は、島根県美濃郡匹見町大字澄川イ945番地に所在する（第14図・図版4-2）。

該地は、民家が点在する上井原地区の上流側にあって、50m北西側には南西流する匹見川が流下している。一方、南東の山裾側は緩やかな傾斜地をなし、そこには石垣築地が数段にわたって設けられ、そのほとんどは水田と化されているが、民家も点在している（第7図）。また、民家を挟んだ南西側約50m地点には、中世の山城を構えた寺戸氏の創建したという澄川八幡宮も存在しているという景観にある。

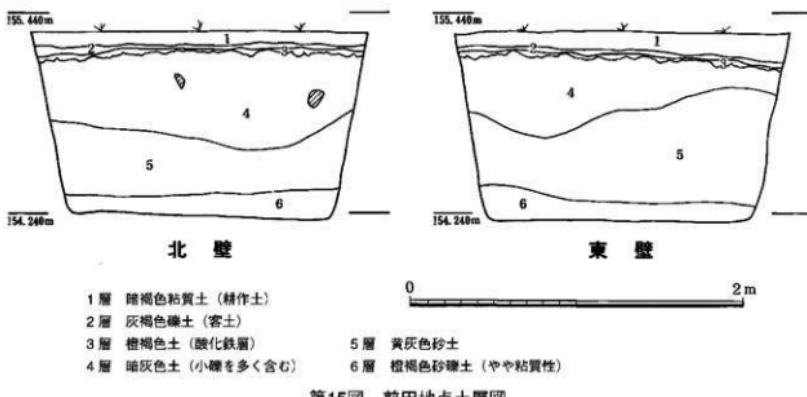
2. 調査の概要

(1) 調査区の選定と設定

調査地点の選定にあたっては、傾斜地に点在する水田のうちでも、比較的緩斜面であった現地点を選ぶことにした（第14図）。そこは標高約155.3mを測る水田で、そこに任意に2mの方形のものを1区設けることにしたのである（第14図）。

(2) 層序

その層序は、1層の水田耕作土、2層の客土としての灰褐色疊土、3層の酸化鉄が含浸した橙褐色土上、4層の暗褐色土、5層の黄灰色砂土、6層の橙褐色砂疊土の順で堆積していた（第15図・図版4-3～5）。



第15図 前田地点土層図

このうち1～2層の人为層といえる層からは、陶器器片を中心に、瓦器質あるいは鐵滓などが採集された。酸化鉄が含浸した3層は、尖滅部から5cmと層厚は薄く、上質においては下位の4層と同一のものと捉えられるものであった。そしてその4層は疊を含んだ暗灰色土で、層厚は20～60cmを測って、厚薄差が大きかった。疊は大きいもので10cm前後であったが、小疊は比較的多く、谷筋沿いという立地が影響しているものと思われた。なお、出土遺物は3・4層の層界部（中には判断できないも

前田地点遺物集計表

層名	チャート	瓦器質土器	陶磁器	瓦	鐵	津	金銀器	計
1～2層		6	26	4	3	1	40	
3～4層	4	7	15		3		29	
計	4	13	41	4	6	1	69	

のもある）に検出されたが、4層上位以下では確認されなかった（遺物集計表）。3層が薄層であったため、遺物包含層を4層としたのは誤認だった可能性もある。

5層は、層厚30～70cmを測る厚薄差のある層位で、拳大以上の礫はなく、ほとんどが川砂であった。そして6層は、やや粘性浴びた棕褐色土。角礫を多く含んでいて、山地の基盤層と捉えられるものであった。以下は、現地地形などの判断から、文化層は認めないと判断し、掘削は中止したのであった。

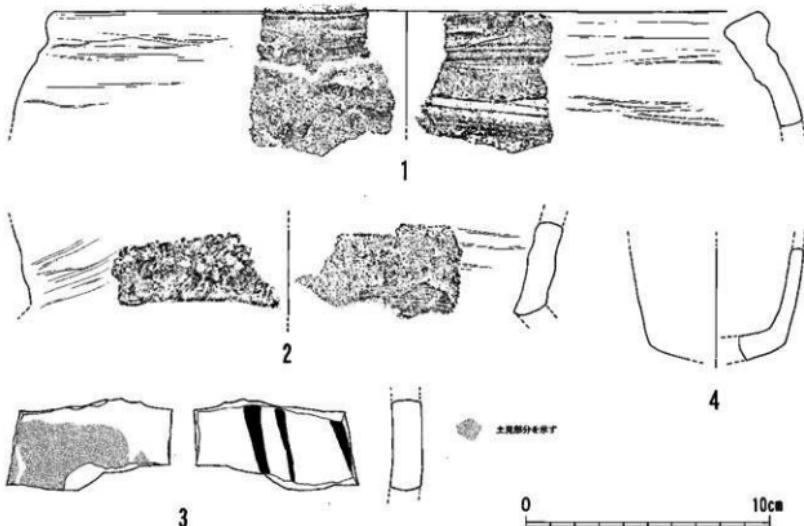
なお、5・6層とも、遺物・遺構は検出されていない。

3. 出土遺物

(1)はじめに

本地点からは、13点の瓦器質土器、41点の陶磁器類、6点の鐵滓、4点の瓦などが出土した（遺物集計表）。

このうち陶磁器類の中には中世以降のものもみられるが、多くは現代のものであった。またチャート質の石片も実測採り上げしているものの、出土した遺物との関連性を捉えることができないところから、層位的にみても、人為の遺物とはいえそうもない。



第16図 前田地点出土遺物実測図

なお、採り上げ層位を3～4層としているのは、3層なのか、また4層なのか、明確でなかったことを意味し、その層部で多出している。以下、本地点での注意に備するものと思われるものの紹介しておくことにしたい。

(2) 尖端遺物（第16図・図版4-6）

1は、3・4層に出上した瓦器質の壺形の口縁部。内外面とも手捏成形したように、器面には指圧などによって凹凸するが、仕上げには布ふうのものでナデを施す。ただし、内面にはヘラ状工具などの強い成形痕がみられる。内外面とも塗釉はみられず、素焼。胎土には3～5mmの大粒の石英の砂粒がみられ、黄灰色を呈する。焼成は堅緻で、中世期の所産のものであろう。2も、3・4層との層部間に出土した瓦器質上器。口端部を損失するが、内外面とも煤が強く付着しているなどから、火鉢ではなかったかと推定する。下端の損欠部には、補修するために使用されたと考えられる接着液としての漆らしき塗幕が付着する。胎土の色調は茶褐色で、焼成は良好。

3は、大皿形の底部と思われる陶磁器。内面には筍葉模様が描かれ、灰緑色の釉を有するが、外面の半分は塗釉されていない。近世期の所産のものであろう。4は、筒形のもので、湯呑み用のものであろう。内外面とも灰緑色の釉がされ、調整・塗釉とも賞美である。おそらく近世期の伊万里焼のものと思われるもの。

第5節 噴地点

1. 調査地点の位置と地形的立地

本地点は、島根県美濃郡宍見町大字澄川1014番地に所在し、そこは寺ノ前地点から南西の山裾側に向かって約60m上がった地点である（第7図）。周辺は石垣築地で段々に水田が形成され、隣接には寺院の自徳庵、そして澄川児童館などが点在している（第17図・図版5-1）。

2. 調査の概要

(1) 調査区の選定と設定

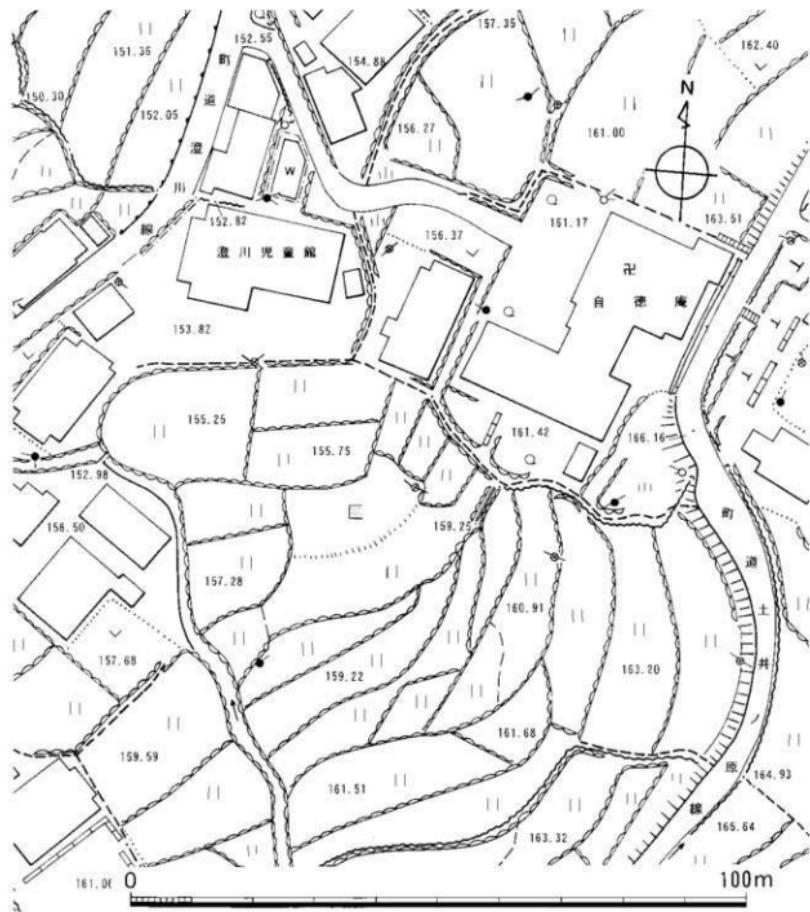
やや凹んだような地形に水田と化され、そこを小谷が流れているといった立地にある。調査区の選定にあたっては、その中でも比較的平坦面を成している水田に選定したのであった。その水田は約700m²の広さをもち、現地表面標高約157.5mあり、任意にその一角に設定したのである（第17図・図版5-2）。なお、調査区は2mの方形のものとし、1区を磁北方向に設けたのであった。

(2) 層序と遺物包含層

層序は、1層の水田耕作土である暗褐色粘質土、2層の客土としての灰褐色小砾土、3層の酸化鉄が含浸した赤橙色土、4層の暗灰色土、5層の橙褐色粘質土、6層の黒褐色粘質土、7層の黄褐色粘土、8層の黄褐色砂礫土の順で堆積する（第18図・図版5-2～5）。

このうち遺物包含層は、混入したものと思われる1・2層から現代のものが18点採集された。また層厚10～20cmを測る3層からは、瓦器質土器が4点、そして下位から1点の須恵器が出上したのである。また層厚40～60cmを測る4層は皆無で、比較的薄層であった10～20cmの層厚の6層からは、須恵器18点、そして焼土が確認されたのである。ただし遺構を捉えることは至っていない。

なお、7・8層の下位からは、1m余り掘削したが、文化層を捉えることはできなかった。本地点



第17図 曜地点配置図

は凹み、また谷筋という立地のためか、粘土あるいは粘質性ということから掘削には困難を極め、また出土した遺物は、総体的に腐壊が著しかった。把握しきれなかったが、おそらく層序においても流入堆積の状況を呈しているものと考えられる。

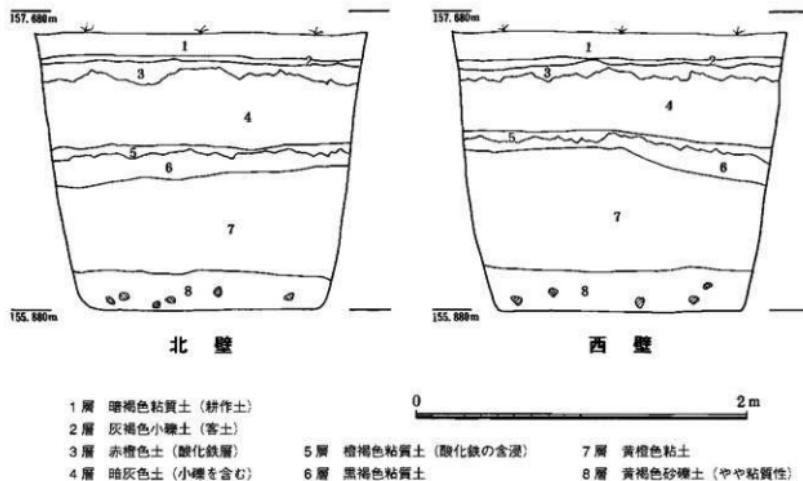
曜地点遺物集計表

層名	弥生土器	須恵器	瓦質土器	陶磁器	焼土	計
1～2層				8	—	8
3層上面			1	1		2
3層下面		1	3		4	
6層	18				2 20	
計	18	1	4	9	2	34

3. 出土遺物

(1) はじめに

出土遺物は、弥生土器18点、須恵器1点、瓦質土器4点、陶磁器類9点の計32点が出土し、他に焼土甕2点がみられた（遺物



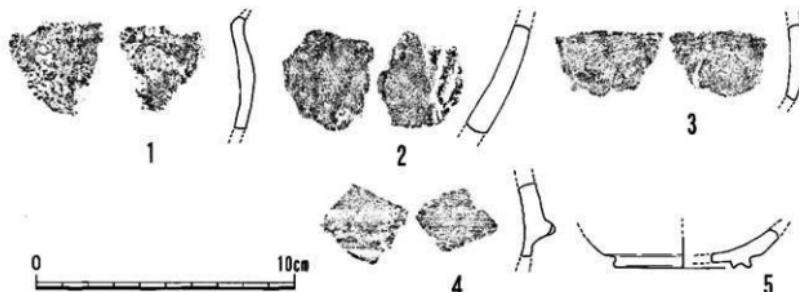
第18図 墓地点土層図

集計表）。陶器以外、ほとんどが小・細片、また腐壊が著しいので、そのうちから数点の保存性が良かったものだけを採り上げておくことにしたい。

(2) 実測遺物 (第19図・図版5-6)

弥生土器 1～4は弥生土器片で、いずれも6層の黒褐色粘質土に出土したものである。このうち1は、口縁部を欠いた胴頸部。内外ともナデ調整で、器肉は6mm測って薄手。胎土には砂粒を含み、色調は橙桃色を呈する。焼成は軟質的で、良好といえるものではない。口縁部を欠くので時期はわからないが、他の出土した遺物の形態などからみて、中期後半のものと思われる。

2・3は、調整・色調・焼成などから、同一個体のものと思われる。内外面ともナデで仕上げられ、2の外面にはヘラ状工具による縱方向の調整痕がみられる。胎土は精緻で、淡赤褐色を呈し、焼成は

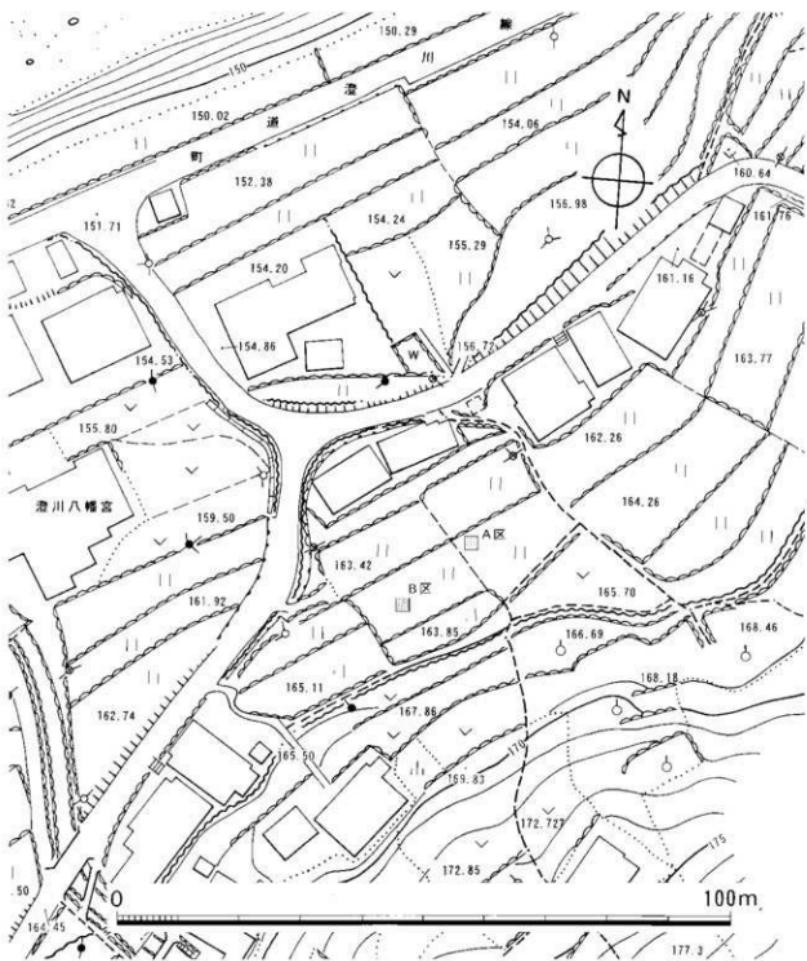


第19図 墓地点出土遺物実測図

極めて良好といえる。3は、長頸壺の頸部片であろう。外面には刻目が施文された三角形の突帯を有し、ナデであるが、内面には横方向のハケメ調整がみられる。

須恵器 4は、3層に出土した須恵器の底部。高台部外面の接置部は凹状を呈し、内外面とも回転ナデ調整である。胎土は精緻で、外面の色調は青灰色であるが、内面は淡灰色を呈する。おそらく8世紀中ごろの坏部であろう。

第6節 家ノ前地点



第20図 家ノ前地点配置図

1. 調査地点の位置と地形的立地

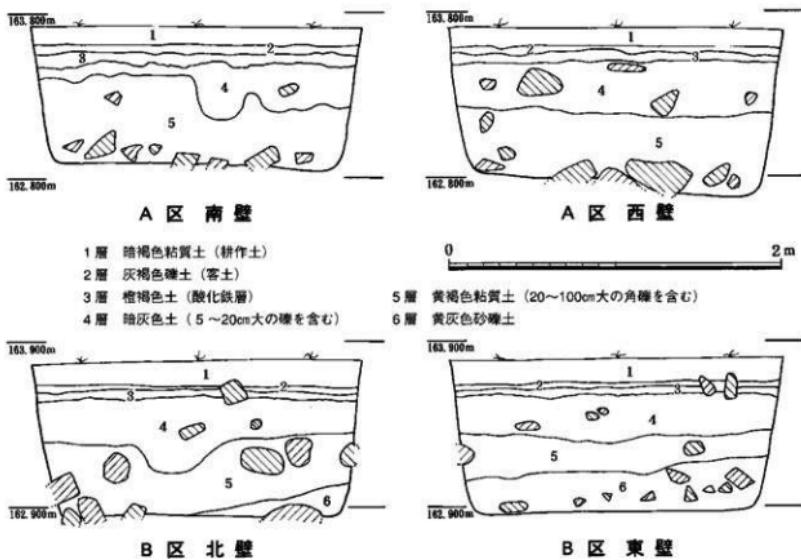
本地点は、前田地点からさらに100m南西の山裾側に上がった場所の、島根県美濃郡匹見町大字澄川イ952番地に所在する（第20図・図版6-1）。

他の調査地点と同じように周辺は傾斜に幾重の棚田、そして民家が点在するといった景観に立地する。ただし背後にあたる南東側は山裾がせまっており、古くは畠地としての可耕地であった様子が窺われる立地を呈している。

2. 調査の概要

（1）調査地点の選定と設定

本地点の北西側（匹見川方向）は急に下って傾斜するものの、該域は比較的緩やかな平坦をなして



第21図 家ノ前地点土層図

山地へとつづき、現地標高凡そ163.7m前後を測る。その現地は畠地であるが、積まれた石垣などの様子から、以前は宅地であった場所ではないか想像する。

調査区は、任意にそこへ2区を設けることにし、2mの方形区のものを磁北に設定したのであった（第20図）。

（2）層序と遺物包含層

本地点の基本的層序は、1層の暗褐色粘質土（耕作土）、2層の灰褐色礫土（客土）、3層の橙褐色土（酸化鉄の含浸による）、4層の暗灰色土、5層の黄褐色粘質土、6層の黄灰色砂礫土の順に堆積していた（第21図・図版6-2-5）。

家ノ前地点遺物集計表

区名	層	名	瓦器質土器	陶磁器	瓦	鉄	滓	計
A区	1～2層		1	8				9
	3～4層		1					1
B区	1～2層		4	79				83
	3～4層		1	55	1	1	58	
	計		7	142	1	1	151	

これらのうち遺物包含層は、1～2層と、3～4層にかけての2つの層位部に出土した。ただし3～4層のものは、両層の層界に出土したものであって上限方式で捉えるならば、実質的には3層とに倣するものである。A・B両調査区とも、基本的層序は同一であったが、とくに4・5層においては北東側のA区の方が厚く堆積するといった傾向がみられた。また石体は、下位層に堆積するほど大きく、それは山石としてと捉えられる角礫状であった。

なお4層中位以下は、他の層位においても遺物包含層は確認することはできなかった。

3. 出土遺物

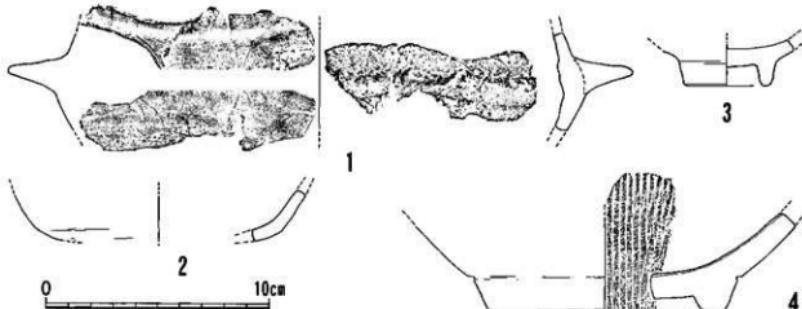
(1) はじめに

本地点での出土遺物は、瓦器質土器の7点、陶磁器類の142点、瓦が1点、鉄滓の1点、合わせて151点であった。とくに多量であった陶磁器類では、中世期のものと想定されるものではなく、近世末期以降のものであった。

(2) 実測遺物（第22図・図版6-6）

瓦器質土器 1は、B区の1～2層から採集された羽釜片。外面に平たく尖った様形の鋲を有し、器壁は総体的に薄手。内外面とも横方向のナデ調整で、そのうち内面は粗い成形痕がみられるが、外表面は平滑である。両面とも黒褐色、胎土色は灰色を呈し、焼成は堅緻といえるもの。

陶磁器 2は、高台を欠いた皿形のもので、薪焼であろう。3は、楕円の底部で、近世期末の伊万里焼である。4は、擂鉢の底部で、肥前系の陶器。



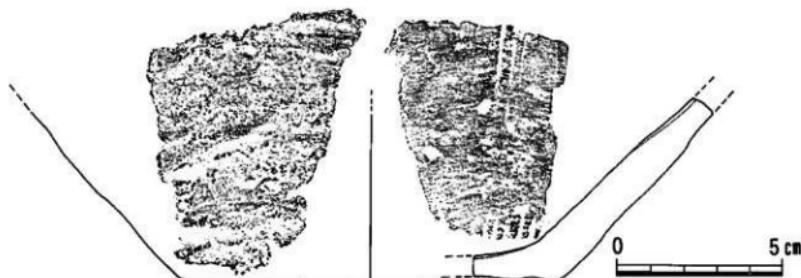
第22図 家ノ前地点出土遺物実測図

第7節 そのほかの調査地点

1. 骨川原地点

島根県美濃郡邑見町大字澄川イ1027番地に所在する骨川原地点は、土井原地区の南西端にあたる山崖に立地する水田である（第7図・図版7-1）。

層序は水田耕作土の暗褐色粘質土、2層の酸化鉄が含浸した客土、3層の黒灰色土、4層の灰褐色砂礫層の順で堆積していた（図版7-2）が、遺物は1～2層以外では確認することができなかった。したがって詳細については記述しないが、1～2層から採集された数点のうちに、中世期のものと確認できる挿鉢片1点がみられた（図版7-3）。



第23図 骨川原地点出土遺物実測図

本点は挿鉢の底部で、内面に数条単位で描かれた御目がみられるもの。ただし、その御目は頻度の使用によって下刷部は抹消する。外面はケズリ調整した後、軽いナデ仕上げである。おそらく16世紀初期の備前焼のものであろう。

2. 家ノ上地点

本地点は、鳥根県美濃郡匹見町大字澄川イ991番地に所在（第7図・図版7-4）し、そこは澄川八幡宮の南西側にあたる（第7図・図版7-4）。

本調査地点では、2mの方形区を1区設けて掘削調査を実施した。しかし陶磁器類数点が採集されたのみで、しかもそれらは紹介に値するものではなかったので、調査内容について割愛する。

3. 四石岩地点

本地点は、鳥根県美濃郡匹見町大字澄川イ849番地に所在するもので、アガリ・アガリノ原地点の上流側河岸端にあたる場所（図版7-5）を掘削調査した（図版7-6）。

ただし本地点は2調査区を試掘したにもかかわらず、1～2層に数点の陶磁器が採集された程度であった。したがって報告するほどの実績の価値がなかったので、割愛することにする。

（渡辺友千代）

図版1 陣ヶ原地点



1. 北西からみた調査地点



2. 南東からみた調査地点



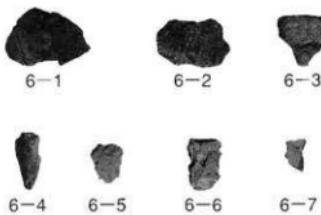
3. B区の北西壁の状況



4. C区の北西壁の状況



5. B区の8層下位面に出土した炭化物



6. 実測遺物

図版2 アガリ・アガリノ原地点



1. 調査地点遠望（南から）



2. 調査地点近景（南から）



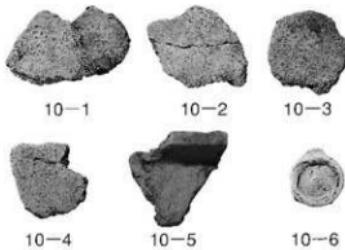
3. C区の北壁の状況（アガリ地点）



4. D区の北壁の状況（アガリ地点）



5. C区の北壁の状況（アガリノ原地点）



6. 実測遺物

図版3 寺ノ前地点



1. 南東からみた調査地点



2. A区の完掘状況（北から）



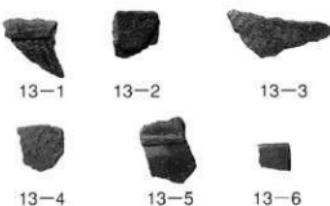
3. A区の南壁の状況



4. B区の完掘状況（南から）



5. B区の東壁の状況



6. 実測遺物

図版4 前田地点



1. 下流の対岸からみた土井原地区



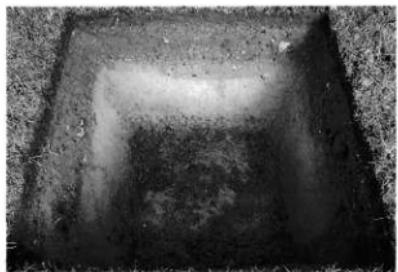
2. 調査地点近景（東から）



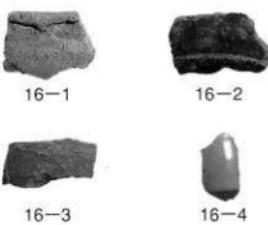
3. 北壁の状況



4. 東壁の状況



5. 実測状況（南から）



6. 実測遺物

図版 5 暫地点



1. 調査地点遠望（南東から）



2. 調査地点近景（南東から）



3. 西壁の状況



4. 北壁の状況



5. 完掘状況（南から）



6. 実測遺物

図版 6 家ノ前地点



1. 南からみた調査地点



2. A区の南壁の状況



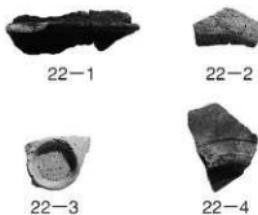
3. A区の完掘状況（南から）



4. B区の東壁の状況



5. B区の東壁の状況



6. 実測遺物

図版7 その他の調査地点



1. 南からみた骨川原地点



2. 北壁の状況（骨川原地点）



第23図

3. 実測遺物（骨川原地点）



4. 南東からみた家ノ上地点



5. 南西からみた四石岩地点



6. 南からみたB区の完掘状況（四石岩地点）

平成13年3月20日 印刷
平成13年3月26日 発行

匹見町埋蔵文化財調査報告書第33集
匹見町内遺跡詳細分布調査報告書 XIII

発行 匹見町教育委員会
島根県美濃郡匹見町大字匹見字1260
印刷 株式会社 谷口印刷
島根県松江市東及江町902-59